世田谷村日記

石山修武

七月十八日

今日も休日だが、今日から動く。

九時烏山で原口氏に会い、北京パラリンピック・パビリオン、トラベル観光北京パビリオンの件相談。烏山駅前のコーヒーショップで。原口氏と話しているうちに、今年再開する室内の連載のアイデアがクリアになった。Aの話をしている時に、いきなりXの考えが浮かぶのは常の事だが、これ程迄のも珍しい。

原口氏は今七十一歳、現役の仕事師である。壮年の頃はスーパーゼネコンの猛烈社員だった。家族を大事にしなくてはの事情があってその通俗路線を離脱。某大手コンサルタント会社に転職、今にいたる。原口氏の今の最大の関心はどうやら猫のジローと烏山周辺のカラスである。先ず猫。数ヶ月前、原口さんの家の前で夜、中学生の女の子が、道にうずくまっていた。なんだろうと思いのぞき込めば、小さな猫を両手に包むようにして、いたわっている。死にそうなんだ、この猫。それで原口さんは「もう夜も遅いから、帰りなさい。猫はオジサンがあずかるから」とあいなって、原口家には突然、猫が一員に加わった。調べてみたら何やらアメリカン何とかやらの仲々の種の猫らしい。そういう素振りをしやがると、言っている。嬉しいような、コノヤローというような、変なところである。それはそれで、色々あって、猫のジローは家族になった。気をつけて観察するに、子猫の耳に傷がある。半分喰いちぎられた様な傷である。烏のヤローの仕業だなと七十一歳のオジサンは考えた。

毎朝、H氏は散歩が日課である。早朝の散歩者は老人が多い。老人は皆早起きだから。ある日、H氏は芦花恒春園まで散歩の足を延ばした。森の中で異様な光景を見た。ハトがカラスにいじめられているのだ。散歩する老人達はハトにエサを投げ与える。それでハトが群れる。烏はハトのエサの豆を食べられぬ口バシの構造なのに、それに割って入り込み、ハトのジャマをする。腹に一モツあるH氏は、それでカラスを追い払う実力行使に打って出た。カラスは飛び去り、H氏はいささか気持も晴れやかになった。猫のジローのうらみも少しはらせた。森を去り、広場に出た。頭にサアーッと何かが当たった。アレ、何だろうと、空を見上げればカラスである。何だこのヤロー見当ちがいしやがって、と歩をすすめると、又、サアーッと頭に戦闘機の如くにカラスが来襲した。見れば前方上空の電線には他の五羽位の屈強そうな奴がH氏をにらみつけている。ヤバイ、とチョッと背中に冷たいモノが走った。恐かった。近くのベンチに幸いステッキ状の棒があったので、それを持って身構えた。背中で鳴いている唐獅子牡丹♪の気分である。相手が仇役のヤクザでなくて、烏ってところが、チョッと寂しい。が、大いにおかしい。しかし、クールになって周囲を見廻した。これがオジさん達の身だしなみだ。こんなところ誰かが見ていたら、モシ、烏に負けて負傷したところなんか誰かが見ていたらの、配慮が働いてしまう。単騎突入の美学はうすい。と、近くのベンチに老夫婦が、まじまじとH氏を見つめているではないか。ヤバイ。これはヤバイとH氏は一たん手にしたドスならぬ棒をベンチに戻した。こんなところをあの老夫婦に見せてはいけないの配慮が働くのだ、オジサンは。それで、ベンチの棒の近くに座り込み三〇分もダース・ベーダーみたいな烏の帝国軍とにらみ合っていた。やがて、烏の方が根負したか、他に仕事の予定があ

ったかで去っていった。Ｈ氏はホッと安堵の胸をなでおろした。緊張して事態を見守っていた老夫婦も、ベンチから腰を上げた。という様な話しを、延々と小さな事件と、大きな事件を組み合わせて書いてゆくってのはどうかな。室内の長井さんがコレ、読んでくれてれば良いのだけれど。それと、Ｈ氏に私が何を頼んだのか、これは少しばかりデッかい事を頼んだ。それを書ければ我ながら面白い。とは思う。

十二時過世田谷村発。六車氏をピックアップへ。十五時前、油壺ヨットハーバー、月光荘へ並木氏を訪ねる。早大ヨット部のＯＢ二名同席してくれて、頼み事二件。いささか食べて、飲む。並木氏は宮古島に家を持って移り住むらしい。うらやましい限り。十八時月光荘を辞す。六車氏を送り、二十一時頃世田谷村に戻る。